

ベキスタン



What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立された国際NGOです。現在、41の国と地域にネットワークを持って活動しています。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では、農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。

鼎談メンバー

ムクシンクジャ・アブドゥラフモノフ大使

1974年、ウズベキスタン・フェルガナ州に生まれる。タシケント国立経済大学卒業後、アメリカ留学を経て来日。小樽商科大学修士課程および北海道大学博士課程を修了。民間会社勤務後、2006年から08年の間、北海道大学博士研究員を務める。民間会社の社長を経てフェルガナ州副知事、外務省経済外交局対外投資担当部長などを歴任し、21年7月に駐日ウズベキスタン大使として着任。英語、日本語のほか、ロシア語、タジク語、アラビア語なども堪能。落語のテレビ番組を見るのが好きで、休日は家族のために日本料理をふるまうことも。

加藤 文彦

1953年、東京都に生まれる。76年、東京大学経済学部を卒業後、通商産業省（現在の経済産業省）に入省。日本貿易振興機構パリセンター所長、資源エネルギー庁石油部流通課長、通商産業省貿易局貿易保険課長などを経て2002年経済産業省大臣官房付、04年に内閣府大臣官房審議官に就任。民間の保険会社の役員のほか、中小企業庁次長を務め、13年から16年に特命全権大使としてウズベキスタンに赴任。現在、全国石油商業組合連合会副会長・専務理事。

中野 悦子

公益財団法人オイスカ理事長。オイスカ・インターナショナル総裁。



駐日ウズベキスタン大使館（東京都港区）にて

左から
加藤文彦氏、
ムクシンクジャ・アブドゥラフモノフ大使、
中野悦子理事長

OISCAという名称の意味

O rganization 機構
I ndustrial 産業
S piritual 精神
C ultural 文化
A dvancement 促進

人間の生存に不可欠な“産業・精神・文化”のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。



新春鼎談

遠くて近いウズ

～シルクロードでつながる絆～



オイスカは2021年からの10年間で、世界で5万haの土地の緑化を行うことを決め、現在、その目標達成に向けた取り組みを各国で進めています。そのうちの4万haは、ウズベキスタンでの沙漠緑化でカバーする予定です。オイスカにとって新しくお付き合いが始まった国、中央アジアに位置するウズベキスタンをより多くの方に身近に感じていただくとともに、同国での活動への理解も深めていただけるよう、駐日ウズベキスタン大使ムクシクジャ・アブドゥラフモノフ閣下と第8代の駐ウズベキスタン日本大使を務められた加藤文彦氏にお話をうかがいました。

ウズベキスタンと日本の関係

中野 本日はお忙しい中、ありがとうございます。私はまだウズベキスタンを訪れたことはないのですが、オイスカ国際活動促進国会議員連盟のメンバーとしてオイスカ活動を支えてくださった元参議院議員の中山恭子さんから、大使として同国に赴任していた時のお話をうかがったことがあり、両国の歴史的なつながりについても興味を持っていました。

オイスカは創立から60年以上、アジア太平洋地域で「土から離れない」活動を続けており、持続可能な農業のための技術支援や各国の青年を日本に招聘して行う農業研修などを地道に積み重ねてきました。1980年からは植林も始め、現在は2021年からの10カ年計画に基づき、5万haの緑化に向けた取り組みを進めており、ウズベキスタンではアラル海が干上がって沙漠化している地域で4万haの緑化を目指しています。

本日はまだ見ぬウズベキスタンが近く感じられるよう、お話を聞かせていただければと思っております。どうぞよろしく願います。

はじめに大使からウズベキスタンについてご紹介いただけますか。

大使 アッサーロームアライクム（イスラム教の挨拶）。はじめにウズベキスタンと日本との外交関係樹立30周年を心よりお祝いしたいと思います。これまでの30年間、私たちは高いレベルの信頼関係を築き、国際舞台において緊密に協力し、支え合ってきました。2019年12月にシャフカット・ミルジヨエフ大統領が初来日を果たしたのは、両国の関係における歴史的出来事であったと思います。政治、貿易、経済、投資、文化、人文分野における協力をさらに発展させるための強い基盤を築くことができました。また、貿易と経済協力の面では、日本は長年ウズベキスタンの主要なパートナーであること

をうれしく思います。この30

日本人の目で見た ウズベキスタン

年でエネルギー、特に石油やガス、そして農業などさまざまな分野における重要で大規模なプロジェクトに対し、日本からの投資が誘致され、経済の安定と発展に大きく貢献しています。また近年は、日本の民間投資が流入し始めていて、観光、教育、医療、IT技術、家電製造の分野でウズベキスタンのパートナーとの共同プロジェクトが開始されています。貿易面ではドライフルーツ、ハチミツ、メロン、ブドウなどが日本に輸出されています。

加藤 コロナ禍でストップしていた直行便が再開しているのではないのでしょうか。もっとも、10月から3月の間はとも、寒いので、日本からの観光客も少なく、直行便は休止されるのですが、人の往来も戻ってきているのでは？ オイスカの方も11月に現地に行かれたと聞いています。

大使 そうですね。水際対策も緩和されていて、ウズベキスタンを訪れる方の数は増えていると思います。また、18年にウズベキスタン政府が日本人に対するビザを免除し、20年からは、両国の外交旅券

所持者にビザ免除措置が導入されたことも、文化や人文交流の発展に寄与しているように思います。私たちの歴史的なつながりと精神的な価値観は、シルクロードを通じて結び付けられていて、現在の交流の基盤となっています。ウズベキスタンも日本もアジアの国なので、顔が似ています

が、それだけではなく、言葉に関しては文法も似ていますし、似た言葉もいくつかあるんです。例えば、「帽子」。頭にかぶるものですよ。ウズベク語で「ボシ」は「頭」を意味します。他にも「お父さん」は「オタ」。

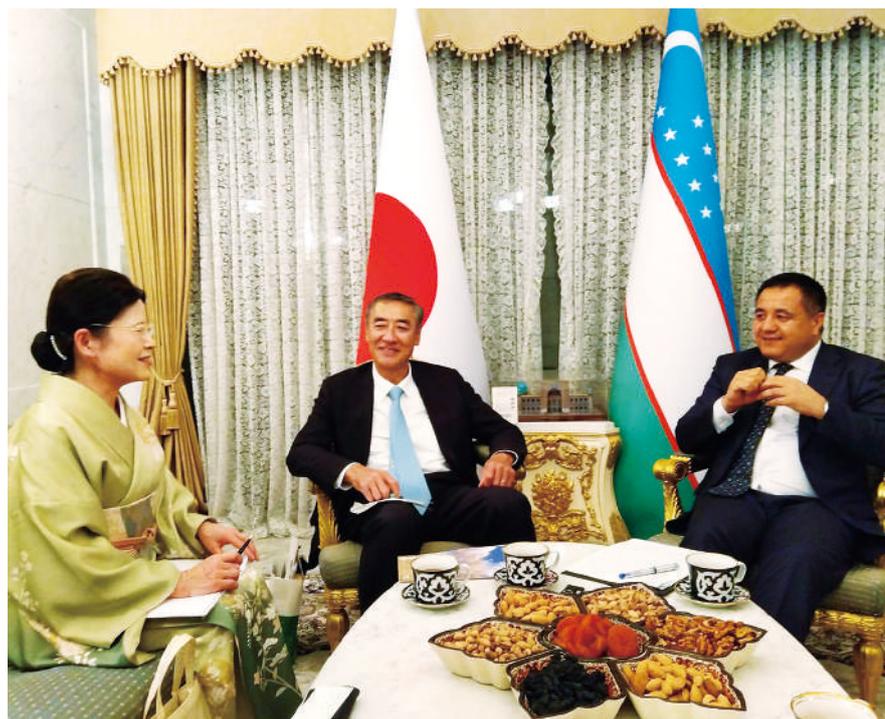
中野 似ている言葉がたくさんあると聞くと親近感が増しますね。加藤さんも大使としてウズベキスタンに赴任中、いろいろな面をご覧になられたと思います。日本人の目から見たウズベキスタンはどのようなお国でしたか？

加藤 先ほど大使から包括的なお話がありました。私は13年から3年半駐在した体験

を踏まえて、少し補足をさせてもらいます。

ウズベキスタンに行くと最初に感じたのは家族や親戚のつながりの強さです。それから同じように近所付き合いも深く、マハラと言われる共同体組織が厳然とあって、これは行政組織にもなっているのですが、このマハラを基盤として近所の仲間とのつながりがとても大事にされています。日本の昔の近所付き合いのような感じ。ですから、結婚式やお葬式もマハラを単位に行われていて、この中で老人をみんなで見たり、子どもも面倒もみんなで見たりしています。開発途上国などでは街なかをぶらぶらしている失業者を見かけることが多いのですが、ウズベキスタンではそうした光景をあまり見ることはありません。これもマハラの中で吸収されているからなんです。ほかに挙げたいのは町がきれいだという点。これもマハラの高齢者が指導しているという側面があるのだと思

います。主婦は毎朝早起きをして家の前の道の掃除をして水を撒き、旦那は洗車するといった具合に、家の周り常にきれいに保たれていて、ゴミも落ちていません。それから、お客様へのおもてなしですね。今もこうしてテーブルにたくさんドライフルーツやナッツの盛り合わせが茶とともに準備されています。お客様をお迎える時は、お茶とお菓子を準備する時はお金がない家庭でも、ないなりに一所懸命におもてなしを



テーブルには何種類ものドライフルーツとナッツが用意されていた

してくるのを感じました。また、町の印象としては、日本の人口構成と全く違い、若者が多くいます。人口の半分以上が30歳未満の若者ということで活気があり、これからどんどん伸びてゆく国だというのを感じます。さらに多くの若者はとても勤勉で能力が非常に高い。本日、同席してくれているナジロフ君（二等書記官 ナジロフ・ジキリ口氏）もそうですが、小さい頃からウズベク語とロシア語



落ち葉の季節でも、タシケント市内の街路樹や緑地の下はいつもきれいに掃き清められていた

の両方を話すんです。先ほど大使もおっしゃられたように、ウズベク語は日本語と文法が似ていて、主語の後に修飾語などが来て最後に動詞といった語順なのに対し、ロシア語は英語と同じ語順で日本語とは全然違うのに、両方を話します。大学で一年ぐらいしか学んでいないのに、日本語がペラペラだという若者たちにも会いました。真面目で能力が高い若者が多いのも印象的でした。

最後に、日本に対する親近感についてお話しさせてください。戦後にシベリアから移された2万5千人の日本人抑留者がナヴォイ劇場の建設に関わったことは有名な話ですが、そうしたことが連綿と今につながっているのだと思います。また留学生の受け入れや教育分野での協力では、考古学の分野で長年ウズベキスタンで活躍された加藤九祚先生や、独立前から今に至るまで現地で活動を続けていらっしゃるタシケント国立東洋大学の菅野玲子先生（22年10月20日に76歳で逝去されました。ご冥福をお祈りいたします）のような方の存在は大きいと感じます。教え子が先生方の取り組みを引き継いでいて、名古屋大学や筑波大学をはじめとする日本の大学と、ウズベキスタンの大学との教育分

野における交流にも発展しています。優秀な若者が多く、元気のあるウズベキスタンと日本とが信頼し合って交流を深めている状況だと思っています。

大使 ありがとうございます。日本人だけではなく、海外の人たちが知らないウズベキスタンのことを加藤大使がお話しくんだり、うれしく思います。私も大学間交流の推進などに力を入れたと考えていて、大使としての最大の目標は、ウズベキスタンに日本の大学を作ることなんです。

マハラについては、昔の日本も同じようだったとの話を私もよく耳にします。特に70年代以上の日本の方は、ウズベキスタンで、地域のつながりの強さや温かさを体験すると、「日本に帰りたくない」とおっしゃるんです。ご自身が育ってきた社会と似ているのでしようね。

中野 私も70代ですから、お話を聞いているとうらやましく感じます。50年前の日本も共同体がしっかりしていて、みんなが助け合って生きていく社会でした。オイスカの創立者は、それを世界に広げて

いこうと訴えていました。国が違っても、肌の色が違って、みんな地球上に生きる家族なんだと。だからみんなで助け合っていこうと。海外の困っている家族に手を差し伸べるのは当然という考えで、創立当初から活動をしてきました。今の日本ではそうした助け合いが希薄になっている地域も多いと思いますが、ウズベキスタンではなくしてほしくないですね。

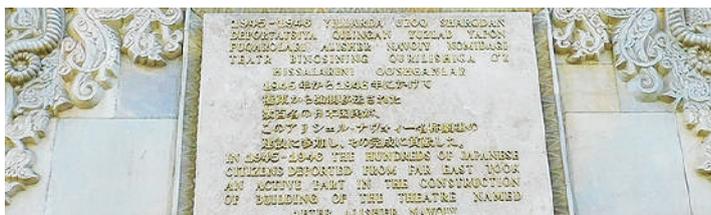
大使 実は、今の大統領も前大統領もマハラという自治組織のよい面をもっと発展させていこうと取り組んできました。冠婚葬祭から誕生日のお祝いに至るまで、日程はマハラのリリーダーに相談して、全員が参加できる日を調整して決めていくんですが、そうしてみんなで助け合って、支え合って社会を築いてきたわけですから、マハラがなくなってしまうたら、ウズベキスタンらしさを失うことにつながるとも思います。ですから国としても、マハラが存続していくようにサポートしているのです。

中野 日本ではマハラのようなつながりは薄れつつありますが、そうした社会のつながりや、先ほど話題になった言葉に至るまで共通点が多いですね。日本とウズベキスタンはアジアの東と西に遠く離れていますが、不思議な気持ちがあります。

加藤 やはりシルクロードでしようかね。

大使 そう。シルクロード！日本もウズベキスタン同様、おもてなしを大事にする国ですよ。それに日本人は皆さん親切です。どうにかして相手を助けてあげようという気持ち強いと思います。特に外国人が相手だと強い。それはウズベキスタン人も同じで、外国人は家族や親戚が近くにいないと頼れる人がいないだろうから、何か困ったら手伝ってあげようと思っているからです。人間は同じとは言いますが、この「外国人に対しての親切心」という点に関しては、私は欧米の国で感じたことはなく、日本に来てウズベキスタンと同じだと感じました。

中野 先ほどナヴォイ劇場の話が出ましたが、日本の抑留者の方々は、大変な労働の中でウズベキスタンの人に助



上/タシケント市内にあるナヴォイ劇場の壁面には、日本人が建築に参加したことが日本語でも刻まれている

下/1966年に発生した大地震で多くの建物が倒壊する中、ここだけが無傷だったことから日本人の仕事が再評価されることとなった

けられたという思いが強かったと聞いています。大変厳しい環境下だったはずですが、後世の日本人が笑われないような仕事をしよう、恥じない建物をつくろうと、精一杯働いていた。すると、そうした日本人の姿を見ていたウズベキスタンの人たちが食料を差し入れてくださったそうですね。

大使 第二次世界大戦直後は、ウズベキスタン国内も食糧難に直面していて大変な状況でした。でも、当時のウズベキ

スタンの人は、日本人抑留者を敵ではなく、仲間だと考え、遠い日本から連れてこられているこの人たちの面倒を自分たちが見なければならぬと考えたんですね。そして、日本人からたくさん学ばせてもらっていました。一例を挙げれば、水も豊富になく、お風呂に入れる環境ではなくても、水で浸した手拭いで体を拭き清めてきれいに行っている。当時の人たちは「こんな状況下でも日本人は自分の体を清潔にしている。だからこそ美しい仕事ができるのだ」と考えましたし、その仕事の進捗も予想以上のものでしたから、「日本人のように働きなさい」と親は子どもに教えるようになりしました。

中野 そんな風にウズベキスタンの人たちが見てくれていて、日本の人たちもうれしかったと思います。

大使 もちろん抑留はつらいことですが、シベリアやほかの場所ではなく、ウズベキスタンでよかったと思った人は多いと思います。実際亡くなられた人の数も一番少ないのではないのでしょうか。

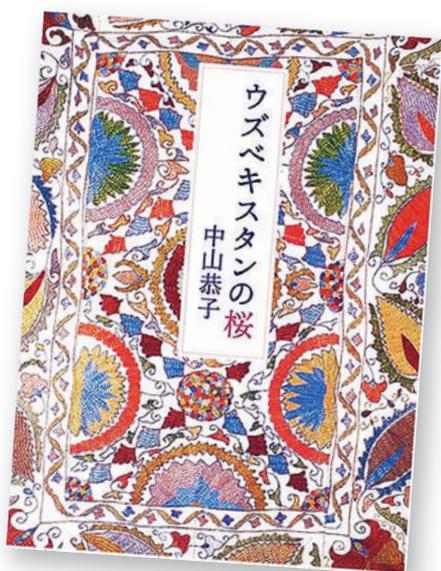
中野 日本人は亡くなった人のお墓をとっても大事にします。イスラム・カリモフ初代大統領は、「日本人抑留者墓地で眠っている人たちは捕虜ではない。国づくりに貢献してくれた恩人だ」と言って、丁寧に扱ってくださいましたと聞いています。この話を聞いたとき、

地を見に行ったら、地元の人たちの手で手厚く守られていた。だから「お父さんはここで仲間と一緒に眠るのがいいんだ」と納得して、日本でお墓を建てるために用意していたお金は、お墓参りにウズベキスタンまで来るための旅費にすると話された。そんなエピソードからも、ウズベキスタンの方たちがどれほど日本の抑留者のために力を尽くしてくださいってきたかがわかります。

大使 18年にフェルガナ州の副知事を務めていた時、コカンド市にある墓地を訪ねたいという日本人を私が案内することになりました。見学してもらえる状態なのかかわからないまま下見に行くと、びっく

りするほどきれいに管理されていました。ここには、日本人だけではなく、ドイツ人もポーランド人も眠っていて、その隣にウズベキスタン人のお墓がありました。誰でもお参りできるように管理されていました。墓守は一人です。仕事をしているというので、すから驚きました。やはり先ほどお話ししたように、外国人のお墓は親戚や家族がすぐにお参りに来ることができないから、自分がしっかり守らなければならないという考えなんですね。

中野 ありがとうございます。これも中山恭子さんからお聞きしたことです。タシケントの日本人墓地に眠る人たちのためにサクラを植えた後、



『ウズベキスタンの桜』
中山恭子著/KTC中央出版発行

初めてウズベキスタンに触れる人におすすめ。同国の歴史や文化、日本とのつながりなどがわかりやすく書かれた一冊

アラル海での挑戦

いくことを期待しています。

中野 オイスカの創立者は明治20（1899）年の生まれで、子どもの時から日清・日露と続く戦争、大人になってからも大東亜戦争を体験し、戦後生まれの私たちとは違う生き方をしてきました。日本はアジアから信頼される国にならねばならないとの思いが第一にあつて、主に東南アジア地域の農村開発のお手伝いをしてきました。

大使 今、そうしたものを伝えていくために、日本と共同で映画を作ろうという動きがありますよ。

中野 それはいいことですね。トルコのエルトゥール号遭難事件とその後、両国の友情を描いた映画『海難1890』は、広くその史実を知らしめましたからね。映画の完成が楽しみです。

大使 多くの日本人にとってウズベキスタンはなじみの薄い国かもしれませんが、私たちの友好関係には長い歴史があります。また、日本ウズベキスタン協会や福島県文化経済交流協会、名古屋ウズベキスタン友好協会などは、両国間の文化・教育交流を進展させ、日本におけるウズベキスタンの知名度を上げるために貢献しています。こうした民間での交流がさらに広がって

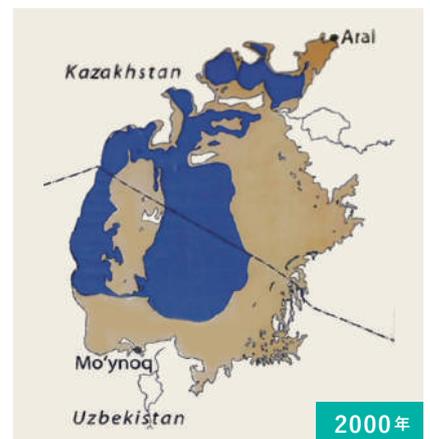
くれています。私たちもウズベキスタンの方たちとの信頼関係を築きながら緑化を進め、日本人がこの地から離れても、「かつてここに日本人が来てくれて一緒に植えたんだ」と、地域の人たちが木々を守り続けてくださるようになっています。ねばならないと思いましたが、**加藤** 干上がったアラル海が沙漠化しているところには、どんな木を植えるんですか。
中野 乾燥地でも育つサクサウルという木です。この根に漢方薬のもとになる植物を寄生させ、それを育てて、収穫することで地域住民の現金収入にもつながります。この技術は中国の内モンゴルで続けてきた沙漠緑化プロジェクトで確立したものです。
加藤 もう十分な経験があるのですね。先ほど、日本人墓地にサクラを植えた話が出ましたが、ウズベキスタンにはもともとサクラはありませんから、専門家の方が、土が合うかどうかをとんでも気にしていたと聞きましたし、実際全部根付いたわけではなかったの、沙漠ではどんな木を植えるんだらうと気になりました。水分だけではなく、酸性なのかどうかといった土壌の性質が重要ですからね。
大使 サクサウルは沙漠に育つ木ですから大丈夫です。



上／沙漠に育つサクサウル。地面を埋めつくす貝殻は、かつてここが湖底だったことを物語っている
左／植林は、先が尖ったスコップで穴を明け、そこに苗を入れて足で砂を踏み固めるだけのシンプルな作業

ウズベキスタン政府も植えてきた木です。
中野 オイスカでは富樫智という林学・土壌学の専門家が主に現場でプロジェクトを担当します。
加藤 富樫さんのことは私も存じ上げています。粘り強く活動を続けていますね。
中野 ええ、ありがとうございます。アラル海の話が出てきたので、改めて大使からアラル海のことを詳しく教えてくださいいただけますか。
大使 アラル海は、ウズベキスタン北西部とカザフスタン南部の間に位置していて、20世紀後半までは世界で4番目に大きな塩湖でした。アラル海に流れ込む水のほとんどは、アマダリヤ川とシルダリヤ川から流れ込んでいましたが、60年代、当時のソビエト政府がアジアの沙漠地域の農業開発を目的とした灌漑のために、これらの川をアラル海流域から別のところに流すことを決めました。それ以降、アラル海の水位は急激に低下し始めました。14年8月にはNASAの衛星画像によって、アラル海東部が完全に干上がったことが示されました。今では

アラル海縮小の変遷



アラル海の面積は60年当時の10分の1以下にまで縮小しています。湖の端から約200kmにおいて、すでに500万haも干上がってしまいました。ここで営まれていた漁業や水産加工業は衰退しましたし、沙漠化が進むことで飲料水の不足、地元住民の健康と生活の悪化など、多くの悪影響をもたらしています。世界のほかの沙漠も同じですが、アラル海の場合も人々の福祉、社会経済の発展、生物多様性と生態系の保全に必要なインフラと社会環境が欠けています。ウズベキスタン政府としても中央アジア諸国や国連機関、そのほかにも国際的なパートナーと協働で、アラル海の問題

の緩和のために多くの措置を講じていますが、経済発展と住民の福祉の向上については、さらに緊急度を増して対策する必要があると感じています。

また、アラル海の被害は局地的な問題ではなく、世界的な問題でもあります。近隣諸国に砂が飛んでいるというだけではなく、北極海の氷にもアラル海の砂が付着していることが分かっています。そのような状況下で、シャフカトフ・ミルジョエフ大統領が推し進める近隣諸国との友好的な外交政策は、アラル海の問題解決と地域住民の生活水準向上のためのそれぞれの国の取り組みを一つにして

いくことに寄与しているといえます。

オイスカのような民間の団体が、会員の皆さんと共にアラル海の緑化プロジェクトと、この分野における専門家の育成に取り組んでくださっていることに対し、深く感謝します。このプロジェクトにより、環境状況と地域住民の福祉が大きく改善されるものと確信しています。アラル海の問題は政府と民間の力を合わせた取り組みが必要であること、そして生態系の被害規模は年々拡大しているため、アラル海地域の環境状況を改善するには、包括的な支援が必要であることを改めて強調したいと思います。

ウズベキスタン政府による近年の環境関連の取り組み

■グリーン経済へ移行する国家戦略と再生可能な水素エネルギー開発プログラムがスタート。これにより2030年までにエネルギー効率は2倍に上昇し、再生可能エネルギーの割合は少なくとも25%を達成する。

■アラル海の各種被害の緩和、沿岸地域の発展に対する取り組みに関心を持つパートナーとの協働を目的として、「グリーンエネルギーに関するハイレベル国際フォーラム」を本年ヌクスで開催することを国連に提案。昨年5月の国連総会で承認された「アラル海域を環境革新と技術のゾーンとして宣言する」旨の特別決議を実現する上で重要なものとして期待されている。

■21年に行われた国連気候変動枠組み条約第26回締約国会議（COP26）において、30年までに、GDP単位当たりの温室効果ガス排出量を10年比で35%削減するとの約束を追加。

■22年10月、タシケントで開催された第16回日本ウズベキスタン経済合同会議にて、両国政府の間で、2国間クレジット制度の（Joint Crediting Mechanism/JCM）の構築に関する協力の覚書への署名がなされた。また、ウズベキスタン環境庁と日本の環境省の間で環境保護分野における協力の覚書も交わされ、協力構築への大きな足掛かりとなった。

日本の 対ウズベキスタン支援

加藤 私が大使として赴任中に見たエネルギーや環境に関する問題点についてお話しすると、残念なことにウズベキスタンでは、まだ電力不足が深刻なんです。冬に電気が止まり、暖房が使えないといった状況がありました。

中野 ウズベキスタンでは電気エネルギーを輸出しているのではなかったでしょうか。

大使 実は、アフガニスタンやキルギスタンなどと電力供給に関する契約を結んでいるため、自国が困っても電力を輸出しなければいけないという事情があるんです。

加藤 10年ぐらい前、私が着任してすぐに大統領にお目にかかった時、とにかく電力の問題を何とかしたいとおっしゃられました。高いレベルでの経済発展を目指すウズベキスタンにとって電力供給は欠かせないものですが、一日のうち半分ぐらい停電することもある日常的な状況の中、安くて効率的に、かつ環境に負荷の少ない電力供給を目指し

たいとお話でした。何とか貢献したいと考え、円借款事業として、450MW（メガワット）の非常に効率のいい発電所を3基ほど導入することができました。これは対ウズベキスタン円借款事業としては最大のものになり、国民の皆さんの生活向上に貢献できたのではないかと思います。また、もともと海外から輸入していた低品質の石炭を使った火力発電所に、高効率のガスタービンを導入したことで、二酸化炭素排出の削減にもなり、気候変動対策にもつながったものと考えます。

それからアラル海の問題に
関連したことです。もともとはシルダリヤ川とアムダリヤ川からの水が流れ込んでいたのが、綿花栽培のための灌漑が原因で水が行かなくなり、干上がってしまったわけですね。その灌漑用のポンプも質が悪いものが多く、すぐに壊れるという問題を抱えていました。それを日本製の高品質のポンプに替えることにも円借款で取り組みました。その結果、効率的に水を使えるようになり、以前より多くの水がアラル海に流れ込むようになったと考えています。日本政府として直接アラル海の沙漠化に対して支援をしてきたわけではありませんが、こうした円借款による支援事業により間接的に関わってきました。また、日本が主導して国

オイスカの取り組み

連に設置した「国連人間の安全保障基金を通じたアラル海の自然災害による影響を受けたコミュニティの強靱化」プロジェクトに200万ドルの支援をしていますので、プロジェクトを通じてアラル海沿岸地域への貢献をしてきたといえると思います。

中野 オイスカは民間の組織で、国家間の支援のような大きな貢献はできません。たった4万haですが、オイスカにとっては大きな挑戦です。NGOらしくウズベキスタンの皆さまとの関係を築いていくという思いで、アラル海の問題に挑んでいきたいと考えます。その一つが、研修生の受け入れです。今年度は、初めてウズベキスタンの青年を農業研修生として日本に招聘しました。彼はコーディネーターとして現地での活動を

担うわけですが、帰国前に乾燥地造林の研修の位置づけで「海岸林再生プロジェクト」を訪問しました。このプロジェクトは、東日本大震災の際に津波で流されてしまった海岸の松林を再生させようとオイスカが主導して、全国の皆さまからのご支援をいただきながら、また、被災された農家の方たちの技術を生かしながら100haの海岸林の再生を進めているものです。全長5km、幅200mの松林を目にした彼は「100haの森がこんなに大きいのに、私がいかに取り組むのは4万ha。想像がつかないし、本当にできるのだろうか」と不安を口にしていました。若い彼が安心してプロジェクトを進められるよう、日本からもできる限りのサポートをすると約束をしています。

加藤 4万haってすごい広さですよ。

大使 実は私も21年12月にアラル海の入りのムイナクという場所に初めて行きました。目の前に広がる沙漠にさび付



川の近くなど水が確保できる地域では今も綿花栽培が盛ん



アラル海の入り口ムイナクにある「船の墓場」。この先に広大な沙漠が広がっている

いた船がある「船の墓場」と言われる場所を見て、前はここまで海だったということがどうしてもイメージできませんでした。塩が浮き出てきている足元の砂が風で飛んで健康に害を及ぼしているということや、新生児が長く生きられない地域もあると耳にしています。先ほども話した通り、もはやウズベキスタンだけの問題ではなくなっています。私がフェルガナ州の副知事を務めていた時、政府も170万haにサクサウルなどを植えてグリーンゾーンを作りました。アラル海周辺の住民だけではなく、全国から人が集まって、必要な車両や機械な

どの供与をしながら、みんなの力で取り組んだのを覚えています。最初にトラクターで土を耕し、飛行機で播種しました。本当に大きな仕事で、お金も相当費やしましたが、それはウズベキスタンの未来のためです。そして、全世界の未来のためです。1、2年後、しっかりと縁が根付いてきて地域も変化してきました。先ほどたったの4万haとおっしゃいましたが、面積の問題ではありません。日本の民間の団体がこうして取り組んでくださることで、それを見た多くの国の人たちが、「自分たちも世界の未来のためにやってみよう」と思ってくれるこ

とが大事なのです。それぞれが小さな面積でもいいんです。各国の皆さんが、アラル海が直面している問題がウズベキスタンだけのものではなく、世界の問題だと認識して取り組むことが必要です。だからしっかりと向けてアピールしていくことも大事になってきます。今、サクサウールの植林についてはドイツ政府が支援しているところがあると聞いていますが、外国のNGOの支援によるプロジェクトは初めてだと思えます。

中野 緑化にとどまらず、漢方薬の原料となるニクジュヨウの栽培もしながら地域住民の生計向上も目指していきたいと考えています。それに先ほど大使がおっしゃっていたように、新生児の死亡率が高いといった課題の解決にもつながったらと願っています。**加藤** プロジェクトの実施のためにはお金も相当かかると思いますが、どのように調達するのですか。**中野** それが課題です(笑)。募金も呼びかけなければなりません。もちろんさまざまに助成金なども活用する予定ではありますが、オイスカは全国

に13の支部があり、会員の皆さんが活動を支えてくださっています。いくつかの支部からはアラル海の緑化を応援したいとの声があがっています。また、愛知県支部の会長さんが沙漠緑化を支援するNPOを立ち上げていて、富樫が進めてきた内モンゴルでの活動の支援にはじまり、ウズベキスタンでの取り組みも応援してくださいっています。もう5回もツアーを派遣して、多くの方が現場での体験もしています。こうした支援の輪を全国に広げたいと、本部のスタッフが、来年度あるいは再来年度、日本からチャーター便を飛ばして、全国の会員さんにツアーに参加してもらおうと考えているようです。

大使 ぜひそうしてください。協力します。それに、私はいろいろな自治体に招かれて講演をするのですが、主に経済、人材、観光の話をしています。これからはそこにアラル海の話も加えて、オイスカの取り組みを伝えていきたいと思えます。数は少ないかもしれませんが、共感してくださる方が出てくるように力添えをさせてもらいます。**中野** ありがとうございます。ツアーは実現するかわかりませんが、植林に参加するとうただけではなく、古きよき日本が残っているウズベキスタンの風土に触れることで、本来の日本を取り戻すことにもなるかもしれません。**大使** 私の知り合いの社長さんの会社には、ウズベキスタン人がいて、そうした縁もあり、その方は何度もウズベキスタンを訪問しているのですが、どんどんウズベキスタンが好きになって、とうとう投資をして会社まで作っていました。もちろんビジネスではありませんが、それを通じてウズベキスタンのために貢献したいという思いからです。**中野** そういう意味では、オイスカはウズベキスタンの経済発展に寄与することはできませんが、緑化を通じて友好を深め、見えない財産を築いていきたいです。本日はウズベキスタンの皆さんのお人柄や文化、習慣などの面でも相通ずるものをたくさん感じることができてうれしく思いました。貴重なお話を聞かせてくださり、どうもありがとうございます。